

## 『限りなく豊かな恵み』

聖書 エフェソの信徒への手紙 2章 1～10節 讃美歌 14 451 458 464 25

説教 森田幸男牧師

以前にもお話したことがありますけれども、森有正というクリスチアンの思想家がおりました。日本の最初の文部大臣は森有礼、その息子が森明で、東京の中渋谷教会の牧師でしたが、その息子ですから、森有礼の孫になります。もう大分前に亡くなりました。この人が東京で、『アブラハムの生涯』という題の講演をいたしました。その講演の中で、「アブラハムという人は、人間の型なのだ。」こういうふうに言っています。意味するところは、人間それぞれ二人と同じ人はいないわけです。けれどもアブラハムが辿ったその生涯というのは、人間ならば誰しも、アブラハムと同じ道を歩むことになる。そういう意味で、アブラハムの生涯は、これは人間の人生の典型なのだ、という意味で「アブラハムは人間の型である」と言いました。

アブラハムの生涯は175歳でした。世界で一番の長寿者百二十歳くらいですね。アブラハムはそれより長生きです。旧約聖書においては、やはり長生きというのは神様の祝福の“しるし”でありました。でもこれも“しるし”でありますから、幼くして死ぬ者もあるわけでありまして、そしたらそれは祝福から漏れているかということ、それはそんなものではないわけです。短い人生であっても、アブラハムが人間の型なのですから、その短い人生に試練もあれば、そしてそれを越えて神の祝福にあずかるのです。

今そういうふうに申しましたのは、今日読んでいただきましたエフェソの信徒への手紙の2章1節から10節、ここに書かれてあることは、すべての人の人生の要点を語っていると思うからです。すべての人なのですから、私の人生も語っている。勿論、パウロの人生も語っている。そういう意味を持つ今日の箇所が、今朗読されましたけれども、分かることもあれば、分りにくいところもあったと思います。しかし、これは私たち一人一人の人生のことを書いている、そういう箇所であると言ってよいと思います。少しずつ読んでいきたいと思えます。

ところで、「地獄の苦しみを味わった」というふうな表現、形容があります。皆さんも今日まで生きて来られて、その中で本当にそのように言いたくなるというか、どん底に落ちてどうにもならない苦しみをそれぞれが経験されていると思います。でもこの言い方は、地獄の痛みというのは、地獄に落ちたような痛みということで、本当にひどい痛みを言うわけですが、言わばこれは“たとえ”ですね。

皆さんの中で、地獄に落ちた方はおられるでしょうか。地獄の痛み味わったということはあると思うのですが、地獄に落ちた方はあるでしょうか。わたしは地獄に落ちました。聖書時代の人、まあ昔の人と言ったらいいでしょうか。近現代のこういう科学、物理学、宇宙物理学というものが、今のように進まない昔の人たちは、「三層の宇宙観」と言われるそういう宇宙観を持っていました。三層というのは三つの層で、天があって、そして私た

ちが住む地があって、そして地の下の地下がある。この天、地、地下、この三層の宇宙観を持っていただけです。今日そんなことを主張すれば、幼稚園の生徒にも笑われるかもしれないような、ある意味では単純な宇宙観であります。

この前も何度か紹介したあのアメリカの女性宇宙物理学者のリサ・ランドールの「五次元の世界」というのは、わくわくするような今日の最先端の宇宙物理学の仮説ですね。それが実験されて証明されるかもしれないというので、今年から来年にかけてはそういう世界ではもう画期的な時を過ごしていて、その実験する施設がスイスのジュネーブでしたね。その地下に何千億もかけて実験施設が造られているということです。そこで今年実験されるのですね。そこで彼女の五次元の世界というのが証明されるかもしれないということです。そういう現代の最先端の宇宙物理学からすると、「三層の世界」というのはもう笑い草になります。けれども、精神的意味というか霊的意味というか、信仰の意味においては、この「三層の世界観」というのは、わたしは意味深いものがあると思います。

神は天にいます。私たちも、「天にましますわれらの父よ」と祈ります時、私たちはうつむいてお祈りする習慣がありますけれども、「天にまします」と言う時、心は上を向いて天に向かってお祈りしていますね。神様は天におられる。我々人間は地上に住んでいる。単純化して言いますよ。神様の御心に添わない者は地獄に落ちる。地下の世界の最低辺、底の底、どん底、それが地獄です。そして意味はどういうことかということ、それは天におられる神様から、本当に無限に隔てられたどん底の底です。ですから中身は、そこでは神様に感謝するとか礼拝するとか、そういうことから排除されたそういう地位と言ったらいいでしょうか、それが地下の世界のその底が地獄であると言ったらいいでしょうか。

其処ではもう神様から無限に引き離されているわけです。地獄に落ちた仲間も、「俺たちも地獄にいるけれども、お前ほど悪くはない」と地獄の仲間からも“総すかん”をくって、地獄の仲間からも軽蔑されるような状態と言ったらいいでしょうか。だから地獄にもまた三層があると言ったらいいかもしれませんね。地獄の上、地獄の中、地獄の下。そして本当の地獄の苦しみとは、下の下の苦しみのことです。

わたしはそこに落ちました。そこは人から蔑まれる孤立地獄です。人に助けを求めることはできず、神様から無限に引き離されています。それは仕方のないことです。それなのにわたしは何と言ったか。「神様、助けてください」と叫んだのです。虫のいいことですが、他の言葉は出てこなかったのです。神様から引き離されて仕方がない者であるにも拘わらず、その時、「神様、助けてください」と叫んだのです。そしてその叫びが聞かれた。それ以下のどん底はないのですけれども、その底から、「神様、助けてください」と叫んだのです。気がつく、その底の底、下の下のその下に神様はおられ、落ちたわたしを押し上げてくださったのです。そして地上に戻し、そして天上にまで引き上げてくださったのです。そういう経験です。

さて、今日の箇所へ戻りますけれども、もう一度読んでみますと、パウロはこう言います。「さて、あなたがたは（エフェソの人のことで異邦人、これは我々のことでもあるのですけれども）以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者　これは、この世にも力を持って、お金を持って、人を牛耳る力

はあるのですが、空中の勢力を持つというのはまだそれよりも上にいるのですから、この世の権力者というのは、空中に勢力を持つ者の手下にすぎないという、こういう感覚なんですね。ですから私たちはこの世の者にも支配されるけれども、もっとそれよりも強力な空中に勢力を持つ者の支配を受けている。こういう感じなんです。すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊（悪霊と言ってもいいですが）に従い、過ちと罪を犯して歩いていました。わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。」

ですからもう何人であるとか、どんな宗教とかそういう区別は一切取っ払って、あなたがたもこのわたしも皆そういう者であります、ということをパウロは宣告しているわけです。ここに、「以前は肉の欲望の赴くまま、肉や心の欲するまま」とあって、これは縮めたら「肉欲」などということにとられかねませんけれども、「肉」と言うのはもっと広い包括的概念なのです。肉欲も含め、私利私欲というそういうことも含め、ありとあらゆる人間の忌わしさ、そういうものを全部含めた存在のあり様が「肉」です。そしてそれは生来の人間、或いは古い人間と言ったらいいのでしょうか。要するに我々人間のことを一言で言うなら、それは「肉」と言うわけです。これは滅びるものなのですね。「そういう者として生きていました。そして、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです」とパウロは言います。

「過ち」というのは、原語では、「道を踏み外す」「逸脱する」ということです。それが「過ち」と訳されています。要するに、この道を行かないといけないのが、その道からそれるわけです。卑近な例で言いますと、車で走る時、こちら側はこちら側を走る。向こう側は向こう側を走る。それを逸脱して、分離帯を越えたら正面衝突しますね。高速道路は中央分離帯が堅固ですから起こりにくいですが、高速でもそんな事が起こりますね。前の車が一台にぶつかったら、スピードで走っていた後の何台もが玉突き衝突します。これからの時期、北海道では、数十台の車の玉突き事故が起きます。というのは、道路が凍っていますから、車間距離をとらないといけないのですが、詰めて走っていますから、前が転んだら数十台すべて転んで、本当に大怪我をする人が何十人、死ぬ人が何十人ということにもなります。これは実際の例ですけども、一人の人間が道をそれる、逸脱すれば、本人も死ぬでしょうけれど、多くの人がそれに巻き込まれて死ぬんですね。「過ち」というのはそういう「逸脱」というのが元来の意味です。

そして、「罪」というのは「的をはずすこと」です。それは向かうべきところに向かわないのですけれども、銃を撃つ、弓を引く。しかし、的をはずしてしまふ。ですから過ちという逸脱と、的をはずすという意味の罪とは、中身は同じことで、逸脱です。

「そのために死んでいた。」これを書いておりますパウロは、多くの人を傷つけました。今回わたしはもう一度パウロの回心のことを書いている、手紙にも出てくるわけですが、使徒言行録に三回、パウロの回心のいきさつが語られています。三か所あります。三か所もということは、パウロの回心が重大な出来事であったということを表しています。9章が最初で、22章、26章と三回にわたって出て来ます。

そしてパウロのことについて、ダマスコのクリスチャンたちはこんなことを言うのです。「あれは（パウロのこと）エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか」と。これが9章の21節に出ております。だからパウロが回心したということが信じられないわけです。そのようなことをパウロはしたのですが、それにも拘わらず、パウロはそれさえも、神のため、正義のため、これこそ正しい道だと彼は信じて疑わなかったわけです。しかしこれは大いなる逸脱だったのです。

そういうかつての自分のことを省みながら、そして人それぞれでありますから、皆それなりの個性的な人生を生きるわけでありますけれども、しかしそれはパウロにおいてそうであったように、自分のそういう大いなる逸脱、大いなる錯覚と言ったらいいでしょうか、それさえも正しいものとして、そして人を滅ぼすようなことをしていても、それを正しいことと思うような大いなる錯覚の中に人は生きるのですから、人間は自分で自分が分かっているのです。そしてそのために人をも死に至らせる、滅ぼしてしまう。そういう状態を、パウロは、「あなたがたは、そして私たちも皆、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです」と、こう表現しているのです。

先ほど、今日の箇所は私たちの人生をあらわしているのだと申しましたけれども、ひょっとしたら異論のある方があるかもしれません。自分はもう少しまだと言われる方があられるかもしれませんが、パウロはそう言うわけであります。

そしてその後、2章の4節から見ますが、「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、あなたがたの救われたのは恵みによるのです キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」とあります。

本当に三層の世界の底の底の底、3節にありましたね、他の人と同じように、生まれながら神の怒り（或いは裁き）を受けるべき者でした。しかし、憐みに富む神は、キリスト・イエスによって我々を共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。こういうふうにパウロは言います。

死んだ者を復活させたもうのですから、正に奇跡なんですね。そのようなパウロに、やはりキリストが現れ給うたのです。この前、宮沢賢治のことに触れた時に、あの東北岩手の花巻という仏教の強い所で、寺の子として生まれた斉藤宗次郎なる人が、どうしてクリスチャンになったのかと、山折哲雄さんが自分なりに思い巡らして、「そういう世界に神の光が差し込んできたのですね」というふうに形容されました。これはうまく表現されたなと思うわけですが、正にあのパウロにも神の光が、キリストが、射しこんで来た。そして神の深甚なる御心、神の永遠の御計画が彼に啓示されたわけであります。

「啓示」という言葉もキリスト教ではよく使うわけですが、これの本来の意味はどういうことかと言いますと、「隠されているものが示される。」その示されたことが真理であるわけなんですけれども、「啓示」というのは、自分が気が付いていないということが、ある時、今、会堂の向こうの納骨堂の扉が開いていて、木内姉の遺影が見えますけれども、扉が閉まっていると見えません。「啓示」というのはその扉を開くことなのです。すると今まで隠されていたものが見える。知らされる。それをパウロは一言で、「キリストの

啓示」とこういうふうに言いました。キリストが真理を示す主体であられる。キリストがご自身をパウロに現わされたわけです。同時に示された真理は何かといえば、キリストその方であった。こういうことを一言で、「キリストの啓示」とパウロは言うわけです。「しかもそれは、聖徒の中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」と。これは3章の8節を見ながら言っているのですけれども、次の頁の3章の7節から読みましょうか。

「神はその力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。この恵みは、聖なる者たち（以前は聖徒と訳されていたクリスチャンのこと）すべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました。わたしはこの恵みにより、キリストの計り知れない富について、異邦人に福音を告げ知らせしており、すべてのものをお造りになった神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に説き明かしています。」

これは啓示ということですね。聖書では「啓示」という言葉は、最後の黙示録の「黙示」というのは同じ言葉で、訳の違いだけです。「黙示」というのは、これから起こるであろうことが示されるわけです。これから起こることは、我々には分らないのです。しかし神はある人を捉えて、時には預言者であったり、その人にこれから起こるであろうことを示されるわけですね。そういうことが黙示録に書かれています。これを「黙示」と言います。我々に隠されていることが示されるから「黙示」なんです。それが「啓示」なんです。

「すべてのものをお造りになった神は、世の初めから隠されていた秘められた計画が、どのように実現されるのかを、すべての人々に説き明かしています。」こういうふうに言っています。ここで注意したいと思った言葉は、「この恵みは聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」ということです。

このことも何度も申し上げたのですが、「最もつまらない者」とは、どんな人のことを言うのかと言いますと、これはこういう言葉なのです。「大きい」という言葉があります。また「小さい」という言葉があります。この「最もつまらない者」というのは、小さいという言葉の最大級、つまり「最も小さい者」という言葉があります。その最上級の比較級、つまり、「最も小さい者よりも更に小さい者」という言葉なのです。どういう者かということ、地獄の下の下の下、最もつまらない者というのです。「最も小さい者」と言えば、もうこれ以上小さい者はいないわけです。「最も小さい者よりも、もっと小さい者」というのはパウロの造語なんです。ですからこれは言いかえれば、「わたしは下の下の人間です」と言いましたら、パウロはそのわたしに、「あなたはまだ一番下の下の人間ではありません」というのです。自分は「下の下の下だ」と言っているのと同じなのです。そんな最も小さい者よりも更に小さい者、「最もつまらない者」に恵みが示されたのです。

今日の元の頁に戻って1章の3節を見ますと、パウロは初めからこういうふう言うわけです。「わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて（キリストを啓示し、キリストに結び付けて）、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました」と。

最も小さい者よりも、もっと小さくて、下の下の下の人間であるそういうわたしに、父なる神は、キリストによって天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。それで

今日の箇所だと、「キリストと共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。」これ以上に高い位置はない。そこにキリストと一緒に着かせてくださいました。上の上の上、極上のその位置、それも神様と同列の位置にわたしたちを引き上げてくださったのです、とパウロは言っているわけです。

そこでパウロの宇宙観と言ったらいいでしょうか。三層の宇宙観の地下の下の下、そして極上、天の上の上の上、パウロはその両方を経験しているわけですね。そしてどう言うかという、1章の23節を見ていただきますと、「教会はキリストの体であり、すべてにおいて（これは文字どおりすべてなんです。極上も、地下も、宇宙も、すべてなんです。私たちは時々、“皆こう言っている”というような言葉を使いますが、皆とは二人だったり三人であっても、皆なら皆です。何百人かいて皆と言っても、その中の数人だったり二人だったりしますが、皆と言うこの言葉は力を持っていますね。そして私たちはビビってしまうわけです。だから我々が使う「皆」は少し怪しいですが、)すべてにおいてすべての必要を満たしている方（神、キリスト）が満ちておられる場です」とあります。これが教会なんですとパウロは言っているわけです。

ですから神は、キリストは教会に満ち満ちておられるのだけれども、実はすべてにおいてすべてを満たしている方なのです。そのことの啓示を受けたわけですから、「本当に天国へ入れられ、祝福に満たされ、天の上の上の極上に、キリストと共に王座に着かせてくださいました」と、こういうふうにパウロは言うわけですが、これもまた私たちが今あずかっている祝福なんですね。

7節を見ますと、「こうして、神はキリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自分の力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それはだれも誇ることがないためです。」だから誇るならばキリストを誇りなさい、とこういうふうな感じのことをパウロは他のところで言っていますけれども、本当に下の下の下の人間に何の誇りがあるでしょうか。しかしそういうものが天の王座に着かせていただくと、まかり間違うとまた自分を誇りだす人も、世の中にはいっぱい人がいますから、そんなおかしなことになる人もありませんけれども、これは思い違いです。「このことは恵みにより、本当にそのことを信じて救われたので、このことは自分の力によるものではありません。神の賜物です。行いによるものではありません。それはだれも誇ることがないからなのです」と、こういうふうにパウロは念を押すように言います。

パウロは冒頭の1章1節に、「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされた」と言っています。この一句は物凄い含みのあることなんですね。今もちょっと申しましたようなパウロの略歴がありますね。そのパウロの経歴、全てを含めて、全てを「神の御心によって」と、パウロは言うわけです。「そしてキリスト・イエスの使徒とわたしはされたのです。」そしてエフェソにいる聖なる者たち（聖徒・キリスト者を指すのですが、我々はこの地上に生きている肉の者なのですが、)そういうものが、異次元といたらいいでしょうか、肉の世界から霊の世界に移し替えられた者と言ったらいいでしょうか。それが「聖」

です。聖とは、比べるべきものがないという意味です。ただ清いとかではないのです。もうどんな清さも比べものにならないそのものを「聖」と言うのです。だから、「聖なる者」というのは「神様」のことを指すのです。比べものがないわけです。けれどもキリスト者というのは、キリストを信じる信仰によって、聖なる領域というか、そこにもう移し替えられた者なのだ、とパウロは言うわけですね。

次の1章2節を見ますと、「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」とあります。これは手紙の冒頭の常套句なんですけれども、この常套句の中に言うならば、全ての祝福が入っているわけです。

「父なる神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにありますように。」これはまた、私たちの事実でありますね。この事実に目覚めることが「信仰」なんです。ですから今回の事件でも、「敬虔なクリスチャン」なんて新聞に出ていましたけれども、わたしは記者に「我々クリスチャンは、ただクリスチャンというだけで、自分に“敬虔”なんてそのような形容詞は付けませんよ」と言ったのですけれども、新聞に出れば、「毎週教会に行き、礼拝を守っていた敬虔なクリスチャン」とあって、木内さんは敬虔なクリスチャンだったかなと、クリスチャンだったことは間違いないのですが、その人はキリストを信じる人です。その信仰において神があらゆる恵みと平和と、天のあらゆる霊的な祝福で満たされているということ、我が事として受け止めて、感謝している人がクリスチャンなわけですね。木内正子姉はクリスチャンでした。

ですから私たちは、“そんな敬虔なクリスチャンだった人が、どうしてあんな死に方をするようになったのでしょうか”というふうなことは、やっぱり皆疑問に思われるんですね。外観を見るとそうです。ご利益はないのではないかと、こうなるわけですがけれども、信仰の中にすべての善きことがあるのです。他に良いことがあっても勿論いいですよ。それはおまけです。おまけもいいのがありますけれども、信仰の中にすべての善きことがあるのですから、木内さんが還暦の誕生日の復活節に洗礼を受けて、この信仰に入れられました。その信仰が円熟したかと言うと、また？マークがつくでしょうけれど、しかし単純であってもイエス様を信じたのです。その信仰の中にすべての善きこと、祝福があるわけです。

ですから私たちはいろんな目に遭いますし、長く生きて祝福を受ける人もあれば、悲惨な終わり方もあるでしょうけれど、大事なことは、キリストにあって限りない神の豊かな恵みを受け、キリストと共に王座に着かせていただきましたというのは、これは死んでから後のことではありません。「くださいました」と過去形でパウロは言っているわけです。死ぬ前の事実なのです。むしろ「死んでいた者が復活した」とパウロは言っているわけですから、それはクリスチャンの現在の事実です。

10節を見ますと、「なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、本当に肉として造られました。そして「肉」の反対は何かというと、「霊」なのです。「肉の人」「霊の人」そしてまた、「外なる人」それに対して「内なる人」という表現もありますが、私たちは肉なる人として一度造られて、そこでいろんな試練に遭って、そして啓示を受けて、霊の人に新たに造り替えられるわけです。

「しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおい

て造られたからです。 私たちが救われたのは行いによるものではありません。善行によるものではありません。けれども、神は善を否定されるかということ、そういうことではなくて神様は正に善の充満なのです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。」

善い業の中身は何でしょうか。パウロは前段のところで、「この限りない豊かな恵みを、来るべき世のすべての人に現そうとされた」と言っています。ここにも神様の伝道のお働きがあるわけですね。そして同時に、その伝道は善い業であり、また善い業と言われるものを私たちは生きていくのだ。これが、やはりパウロは自分が経験し、これはすべての人に望んでいることだし、それを皆がやがてこれから自分のこととして知っていくという、そういうことが神様の御計画なのだ。こういうイメージで今日のところを書いています。

「善い業」とは、やはりキリストを賜ったということ、キリストを通して限りない祝福を賜ったその父なる神に感謝しつつ、このキリストを、恵みと祝福を証する。それを伝える。他にいろんな数々の善いことがあるでしょうけれども、それは周辺のことなのです。本当に「善い業」というのは、神様が私たちにしてくださったことを感謝し、これをわたしのこと、あなたのこと、皆さんのことだと、いろんなことで不足はあるでしょうけれども、私たちはこのキリストによって天の祝福に、今満たされるのです。このことを感謝し、伝えることに比べられるような「善い業」が、他にあるでしょうか。

ですから、“伝道しなければならない”というそんなちっぽけな表現ではなくて、私たちが今頂いている、入れられているその祝福の事実を自覚する。そしてそのことを本当に感謝する。そして、時には語り、時には手紙を書き、時にはその業を通して、このキリストにおける神の恵みを身をもって証する。そのことを神は望んでおられる。私はそのことに仕えているのです、というこういう自覚でパウロは書いている。これは皆さんのことでもあるでしょうと、こういう気持ちに溢れた箇所が今日のこの“死から命へ”と見出しのついた箇所で、使徒パウロが私たちに証していることではないでしょうか。

お祈りいたします。

恵みと祝福に満ちたもう主イエス・キリストの父なる神様。

私たちのどのような感謝も賛美も、あなたがしてくださった事、していただく事、そしてこの後も変わらずして下さることの前では、本当に塵に等しいような者ではありませんけれども、心からあなたの御名を賛美し、感謝申し上げます。

そのような祝福の中に、既に召された者も、今なおこの地上に生きる私たちも、今既にあずかることを許されていることを覚えて感謝いたします。一人でも多くの人と、この幸いを覚え、あなたに感謝することができるように導きをお願いいたします。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン